



激流に耐えた大肥橋 大分・日田市 2019年11月撤去へ



大肥川が筑後川に注ぐ地点に架かる大肥橋。上流側(奥)にJR久大本線が通る鉄道橋。下流側に国道橋が架かる。

2019年2月10日 中村まさあき撮影

大分県日田市夜明地区を流れる大肥川に架かる扁平な単一アーチ橋が「大肥橋」。架設は1899(明治32)年、橋長27・6m、橋幅4・6m、径間22・5m。文化財指定はない。すぐ下流には国道386号が通るコンクリート橋が架かり、そこで大肥川は筑後川に注いでいる。そこから約2・5km下流には夜明ダムがある。その水位調整のためか、大肥橋のアーチ基底部はいつも水面の下に隠れている。

大肥川を上流にさかのぼると福岡県朝倉郡東峰村に至る。2017年7月の豪雨で甚大な被害を受けた地域だ。気象庁の発表によると、同年7月5日0時〜6日24時の最大24時間降水量が、福岡県朝倉や大分県日田などで観測史上1位を更新している。

川の増水により大肥橋は完全に水没し、流れてきたがれきや流木が、石橋上部に設けられた歩道とのすき間に引っ掛かった。しかし、取付護岸の基底部などが洗掘されたものの、大肥橋の本体は健全で、石橋の強さを証明してみせた。

ただその一方で、付近の住宅には浸水被害が発生している。夜明ダムの発電事業者は、ダム本体に異常はなかったが、ダム管理所が

流失。ダムゲートを開く操作を、雨が小康状態になった5日21時36分に開始し、6日12時35分に全開状態となったと発表している。*

そして、県は昨年3月、大肥川の河川改良工事により大肥橋を撤去する方針を決めた。それを受け昨年5月、地元の歴史愛好家らが大学教授などを招いて大肥橋についての学習会を開催。県は住民説明会を開き、大肥橋の撤去工事を本年11月に実施し、大肥橋そばに土地を確保して、石橋を解体した石材を使ったモニュメント広場(仮称)を設けるとしている。

かつて大肥橋は、1976(昭和51)年にも撤去が決定されたが、ダムの水位調整によって洪水は起こらないと主張する石橋保存派市民の訴えが通り、高欄を取り壊した段階で撤去作業が中止になった経緯がある。*

しかし、一昨年の豪雨を経て、今は住民の多くが県の方針を受け入れているようである。地元では大肥橋が撤去される前に、これまで夜明地区のシンボルであった石橋とのお別れの催しが計画されている。(広報部)

*1九州電力2017年7月6日発表「夜明けダム管理所の損壊事象が発生しました」
*2「大分の石橋物語」田村卓夫著

中面の案内

2面 「中国の古橋」撮影記 その1 (榎 晃弘)

4面 熊本の東陽石匠館で「石匠に訊く」開催

3面 羅漢さんが渡る橋 (末永暢雄)

7面 温故石拱記~霊台橋架設記録~(上塚尚孝)

九州固有文化のルーツ求め

写真集／写真展「装飾古墳」や「眼鏡橋」などで知られる写真家・榊晃弘氏。2016年3月には、中国の隋から清までの時代の代表的な古橋（こぎょう）165カ所を4年をかけて撮影した写真集「中国の古橋」を花乱社から刊行し、写真展を開催したが、この春、その写

「中国の古橋」撮影記 その1

榊 晃弘（福岡県）



写真左は、中国・河北省石家庄市趙県の「趙州橋」（橋長50.8m、橋幅約10m）のアーチ。架橋は隋時代の605年。細長い輪石28列が積まれている。右は、日本の長崎眼鏡橋のアーチで、長崎大水害（1982年）以前に撮影
写真提供／榊 晃弘

てほしいという念願がかない、著者冥利に尽きる思いでいる。しかも翻訳者は、取材に同行したガイド王邦文氏と聞いて喜びもひとしおである。中国での写真集発行が、中国の古い石橋の歴史・文化的価値の確認と保存の一助になれば幸いである。

私はこれまで、九州固有の文化をライフワークとして取材し、写真集を出してきた。その中でも「眼鏡橋」は代表的なテーマで、「中国の古橋」取材もそのテーマにつながるのである。

伝承によると「長崎眼鏡橋は日本最古の石造アーチ橋で、その築造技術は中国から伝わった」とされている。しかし、日本各地の眼鏡橋を撮影する中で、ある疑問を覚えるようになった。

それは撮影した長崎眼鏡橋などの橋の中に、中国特有のリブアーチの痕跡を確認できなかったからだ。

なぜだろうか。ひよっとして、ポルトガル伝来説の方が信憑性が高いのだろうか、と勝手に想像した。伝統とは何か、文化とは…。悶々（もんもん）として謎は深まるばかりだった。

（次号に続

山形と三重のアーチ橋から

ネットで「宮様の石橋」を公開する奈良県の宮川康夫会員。昨年は関東・中部・近畿・中国・四国に及ぶ広い地域を訪れ、数多くの石橋を精力的に紹介している。これまでの活動の中、印象に残った山形県と三重県のアーチ橋2橋を紹介してもらった。

宮川 康夫（奈良県）

写真提供／宮川康夫

網取橋

山形県西置賜郡小国町綱木箱口新潟県と山形県の県境近くの山奥、足がすくむような明沢川の断崖絶壁の上の旧道（ほぼ廃道）に架かっている。橋幅約5m、径間は約20m。訪れたのは東日本大震災の5ヶ月後。

輪石も壁石もかなり乱雑な積み方で、アーチの線が微妙に波打って、実に頼りない印象だったが、倒壊に至るほどのほころびは見られなかった。この石橋は、アーチ橋の構造が地震に強いことをはつきりと証明してくれたように思う。



網取橋＝山形県西置賜郡小国町



六把野井水拱橋＝三重県いなべ市員弁町

六把野井水拱橋

三重県いなべ市員弁町下笠田三岐鉄道北勢線の楚原駅の北、台地の崖下を流れる六把野井水（ろっぱのゆすい）に、奇妙な鉄道橋が架かっている。幅員は2mほど、橋銘板によると竣工は1916（大正5）年。水路の流れに対し斜めに架かる「ねじりまんぼ」だが、ここまでねじれるか、というぐらいにねじれている。

また、一見すると石造アーチ橋のように見えるが、石材ではなく、型枠を使ってこしらえられたコンクリートブロックが隙間なく積み上げられている。石橋ファンなら必見の橋である。

ここから200mほど西には、3連のコンクリートブロックアーチ橋「明智川拱橋」もある。

羅漢さんが渡る橋

方広寺五百羅漢橋 静岡県浜松市

副会長 末永 暢雄(長崎県)

東海道新幹線が通るJR浜松駅から車で約1時間。静岡県浜松市北区引佐町の奥山という地区にたどり着いた。谷あい道の沿いに商店は見かけず、特産品の看板すら見当たらない。田畑が続く風景の中、まばらに家が並んでいる。少し不安になりかけたころ、行く手のこんもりとした小高い林の中から、方広寺の赤い三重塔が見えた。

方広寺は臨済宗方広寺派の大本山で、無文元選禅師(むもんげんせんぜんじ)により1371年(室町時代)に開山された。近年は、宿泊体験や観光で訪れる人も多いと聞く。

石橋に関心を持ち、九州各地に石橋を訪ね始めたころ、どの書物で目にしたのか思い出せないが、浜松市の方広寺にある輪石だけの「石橋」の上に石の羅漢が鎮座する、愉快な写真が記憶に焼き付いた。それで昨年2月、実際にそれを見ようと訪ねたのだった。

門前の土産物店を通り、黒門(総門)を抜け、その先の赤門と呼ばれる山門をくぐると、一転、静かな木立の道になる。道脇に羅漢像が据えられたそこは、「五百羅漢」と呼ばれる一帯だ。

どこかに自分に似た顔があるといわ

れる、それぞれの羅漢さんの豊かな表情を楽しみながら歩いていると、「遊龍窟」の看板があった。「羅漢の渡る石橋あり、崖上の瀑布は龍が遊ぶ窟(ねじろ)」と添え書きされていた。看板を見るまでもなく、斜面上方に求める「方広寺五百羅漢橋」は架かっていた。アーチの下には山か



輪石だけのリブアーチ「方広寺五百羅漢橋」 写真提供/末永暢雄

ら流れ下る細い川。おそらく、雨季はその流れの音が響くと思われる。

方広寺五百羅漢橋は、径間5.4、幅0.45の8本の輪石のみがつながったリブアーチ。橋上には5体の羅漢さんが立ち、あるいは座し、遠くへ眼差しを向けている。一帯の羅漢像を合わせ、石の硬

さや冷たさは、ほのぼのとした情景に変わる。

しばらく眺めていると、例によって、いつ、誰が、何のために、ここに架けたのか……という関心が起こってくる。寺からいただいた資料には次の記述がある。

「五百羅漢の石像 これは拙庵(せつがん)和尚が、大蔵経を読んでいるとき、五百人の羅漢さまが仏法を護り伝えたという記述を読み、御開山無文元選禅師が、かつて中国の天台山方広寺を訪れ、石橋(しゃつきょう)にお茶を献じられたとき羅漢さまが姿を現されたという故事にちなみ、当山に五百羅漢の石像を安置することを発願(ほつがん)せしめ明和七年(1770年)完成した」

この記述から、五百羅漢と共にこの橋は、中国の「天台山の石橋」を模して架けられたものであると考えられる。そこで「天台山の石橋」とは、どういうものであったのか、追ってみた。

石橋文化を語り継ぐ一橋

天台山は、中国・浙江省の南部にある霊場で、石橋(しゃつきょう)は、その名も同じ方広寺にある。「東洋画題綜覧」(金井紫雲編)には次のように紹介されてい

る。

「橋上苔滑かにして稍もすれば転ぜんとす……その橋下は数千丈の深潭にて、その附近に獅子の住むと称へらるゝ神秘的の境なり……渡らんと欲して、その危険を恐れ屢々躊躇(ちゅうちゆ)越りと伝へらる」

天台山の石橋は自然の岩橋で、幅は1.2ほど、高さは1.2ほどでもあるといひ、謡曲「石橋(しゃつきょう)」の題材にもなっている。

これで思い出すのが、大分県豊後高田市にある天念寺の「無明橋」。平安・鎌倉時代には仏道修行と祈願の寺院として栄えた。背後に奇岩がそびえ、頂上部に石橋が架かっている。中国の天台山をここに模したのであろうか。

同市には夷谷(中山仙境)にも細い石桁橋「靈仙寺無明橋」が架かっている。「日本のめがね橋一覽表」を参照

また、千葉県安房郡鋸南町にある日本寺の大仏のそばには、その名も「天台石橋」(石桁橋)があると聞く。

さて、方広寺五百羅漢橋は、人々を渡す目的で架けられてはいない。宗教の尊厳を伝えているのである。しかし同時に私には、石積み(いしづみ)の工法を示し、「石橋の文化」をいまに伝える一橋として貴重に思えた。

山では暗くなる時刻が平地より早い。日没を気にしながら、五百羅漢の小径(こみち)を下りた。

熊本・八代市の東陽石匠館で「石匠に訊く」開催される

写真提供／中村まさあき

岩石・岩盤の変形や崩壊などを研究し国際的に活躍する谷本親伯・大阪大学名誉教授や、肥後種山石工技術継承者の竹部光春氏が参加するイベント「石匠に訊く」が1月6日、熊本県八代市の東陽石匠館で開催された。同館の中野敏憲館長があいさつを行い、同館の前館長で本会上の塚尚孝会長が進行役を務めた。

イベント開催の趣旨説明の後、熊本・美里町の霊台橋保存修理工事（1980年）や鹿児島市の西田橋移設復元工事（2000年）で石工頭を務めた竹部氏とその後継者の一人、荒木大人氏による石割り実演が行われ、後半は上塚会長による日本に残る石橋に関する情報提供や、谷本名誉教授による「世界の石造文化と現状」と題した講演が行われた。（広報部）



石割り実演で大ゲンノウを振り下ろす荒木大人氏（中央）。その右が竹部光春師匠



石橋がマッピングされた九州地図を手に説明する上塚尚孝会長



八代市東陽石匠館の玄関

一部が壊れ全体を守る構造

国際岩の力学会で「石造遺跡保存のための国際委員会」委員長を務めた谷本親伯・名誉教授は、今後、予想される世界的な水不足の問題に対し、先人が残した水路について研究。その中で熊本県上益城郡山都町の通潤用水ならびに通潤橋に注目した。

「通潤橋は見た目も素晴らしいのですが、路面下に逆サイフォンの原理を活用した石造の通水管が通っていて、その一部には木管も使用されています。それはなぜでしょうか。また、熊本地震後の大雨で壁石の上部が崩落しましたが、その下は『釣り石』といわれる仕組みで強固な構造になっているといわれます。そこには、全てを強固なものにするのではなく、『一部が壊れて全体を守る』という構造物に対する考え方がるように思われます。これは、想定外の大電流から回路を守る電子部品『ヒューズ』のようない安全装置と考えることができ、インフラ整備の上で必要な構造であります」と谷本名誉教授は指摘する。

「地元で石工集団がいなくなったユネスコの世界遺産『アンコールワット』（カンボジア）では現在、石工の養成が行われていますが、日本でもぜひ、通潤橋が造られた時代の優秀な石工の技術を後世に残してもらいたいと思います」と期待を表明した。

「石の目」を見て割る

石割り実演は、会場を東陽石匠館の職員用駐車場に移し行われた。参加者らが中央に置かれた石を中心に遠巻きにする中、肥後種山石工技術継承者の竹部光春氏がその「石の目」を見て矢穴の位置を指示した。

「木材には木目が平行な『板目（いため）』と、不規則な波形の『柱目（まさめ）』がありますが、石にも割れやすい板目と割れにくい柱目があります」と竹部師匠は説明した。その後継者の一人、荒木大人氏が竹部師匠が指示した位置に石ノミとハンマーを使って矢穴を掘り、そこに台形をした鉄製のセリ矢を差し込み、大ゲンノウを振り下ろしてセリ矢の頭を2、3回叩くと、金属的な音が響くと同時に見事、石は二つに割れた。

先人の思いも後世へ伝えたい

午後は日本に残る石橋について、上塚尚孝会長が本会のこれまでの調査・集計結果から、九州には全国の石橋のおよそ9割が現存していることを紹介。それは、「江戸時代から明治・大正期にかけて九州には優秀な石工たちがいて石橋を架けた結果であり、通潤橋や霊台橋などは、熊本藩の地方分権が成功していた証です」と説明した。かつて、大雨のたびに流失した木造橋に替え、「永代不朽の石造橋を」という先人の願いにより架け

られた石橋を、その思いとともに受け継いでいくことが大事と語りかけた。

科学的根拠を基に保存を

「世界の石造文化と現状」と題した講演の中で谷本名誉教授は、通潤橋の今後に対する懸念に触れた。

「国際的な調査の積み重ねから、石垣などの目地が開くと石材の表面に植物が繁茂する植生が見られるようになることが分かっています。これまで通潤橋を3度訪れ、変化を見てきて、壁石上部に植生が多いことから、その部分の目地



八代市東陽石匠館のホールで講演を行う谷本親伯・大阪大学名誉教授

谷本親伯(たにもと・ちかおさ)

大阪大学名誉教授。工学博士。エジプトの大スフィンクスや中国・敦煌(とんこう)遺跡などの保存に関する学術調査委員、国際岩の力学学会「石造遺跡保存のための国際委員会」委員長(1995-2006)を歴任。世界の水路トンネルをまとめた国際ハンドブック(2017)*に通潤用水と通潤橋など国内5カ所を紹介している。



*Underground Aqueducts Handbook, CRC Press-London

の開きが考えられます。それが2018年5月の壁石崩落と関連している可能性があるかもしれませんが、植生は崩落箇所以外にも見られるため、通潤橋の状況を常時計測して監視する体制を整えられるよう、山都町長宛に提言書を送っています。また、通潤橋はその築造の背景も含め、世界的な文化遺産としての価値があります。地元の方々はぜひ、世界遺産登録を目指していただければと思います」

谷本名誉教授は1992年、京都大学工学部助教時代、エジプト政府から

招待され、劣化・風化が深刻化する大スフィンクスの修復・保存に関する第1回国際シンポジウムに早稲田大学の吉村作治准教授(当時)と共に出席している。通潤橋の今後に対する懸念は、その際のエジプトでの経験と無縁ではない。

「エジプト考古学庁はじめ関係者は、大スフィンクス本体表面への薬液注入や樹脂による被服、あるいは基底部をコンクリート版に置き換えるなどを検討していました。それで各方面の専門家の意見を聞きたかったのです。私は、スフィンクスの岩盤が石灰岩である特性から、そ

世界的な文化遺産といえる 通潤橋と通潤用水を大切に

のような処置がなされると、元の状態に戻すことができないようになるばかりか、かえって劣化を加速すると意見を述べました」

しかし最初、自然の劣化・風化に対し何もしない方がいいという意見に同意する人は少なかったようだ。

「今、検討されている修復・保存方法に科学的根拠はあるでしょうか。科学的な根拠が示されないまま権威ある人の発言が優先され、10年、50年先に結果的に保存方法が誤りであったと分かるような事態が起きないと言い切れるでし

ようか」と重ねて訴えると、徐々に同意する人が増えたという。

そして、ついにエジプト考古学庁長官にも認められ、長官から修復・保存案の提出を求められた。そこで谷本名誉教授は、モニタリング学術調査を提案。その後5年間の調査を経て、大スフィンクス劣化の原因は、①もともと石の質が悪い②付近の工場の影響による酸性雨の被害③スフィンクスの胸の辺りで強い風が渦を巻く春の嵐。以上3点の影響が大きいこと。また、スフィンクス上部のくぼみにたまった水が石材に浸透し、胸の辺りまで浸透して表面はく

離などを起こす原因
になっていることも
報告した。

調査結果から内的
要因①を除き、外的な要因②と③に対し、酸性雨の原因となる工場の移転と、人工的な処置を行わないで石灰岩に含まれる水分の変化を最小限にとどめるなど、大スフィンクスの修復・保存の対策を提出した。

講演ではその他、ピラミッド直下に断層があることや地下水の動きなど、一般に知られていない貴重な知見も披露された。さらに、中国・シルクロードの敦煌(とんこう)や、謎の多い龍游(ろんゆう)石窟などの調査で分かったことについても紹介された。

追悼 第3代目会長・本田義雄氏

会長 上塚尚孝

第3代目会長を務められた本田義雄さんが、2018年3月にご逝去されていた。享年97歳。葬儀は身内で済まされたとのこと。訃報を知らず、孫の本田伊熙（いき）さんが宮司をされている熊本城稻荷神社を訪れた際、そのことを聞いた。本田義雄さんは種山石工、橋本勘五郎の娘が嫁いだ本田茂三郎の子孫。

16年前のこと、当時、病気で入院中の山口祐造事務局長から、会員数が最も多い熊本で会を推進してほしいとの依頼があり、関西へ移られた2代目会長の片寄俊秀さんから財産諸々を預かった。

本田さんは、会長に就任された初の役

員会で「会のために尽力する」と語られ、「知恵を出す者、汗をかく者、金を出す者がそろつと、運営はうまくいく」とあいさつされた。私は事務局長の立場で「金出す余裕なし、汗出す体力なしだから、わずかばかりの知恵を絞り出すしかない」と自覚した。

2002年から09年までの8年間、会長を務めていただいた。その後は、老健施設に入所しておられたと聞いている。神道では故人の霊を守護神として祭ると聞く。本会の行く末もお見守りいただければと祈りたい。

（2018年9月9日）



中央が在りし日の本田義雄氏。右は前宮司の本田光曠氏（故人）

写真提供／本田伊熙

肥後の名工・橋本勘五郎の曾孫 橋本脩成氏逝去に寄せて

会長 上塚尚孝

橋本家が昔の家を解体されたのは、1975（昭和50）年だったと記憶する。石工・橋本勘五郎の曾孫の脩成（よしなり）氏がその際、「こぎゃんとん出ちきまし」と言つて手渡されたのは、すすけた和紙10枚つづりほどの古い冊子だった。

表紙をめくると右上に「明治十年」、中央に「久具村 寄田川 薩摩渡目鑑橋」の文字が読み取れた。久具村は私の幼いころの住所に当たる。その時、私の脳裏に小・中学生時代に渡っていたメガンバ

シ（目鑑橋）の記憶がよみがえった。

その後、定年退職して4年後、熊本県八代郡東陽村（現在・八代市東陽町）の東陽石匠館に勤務することになり、東隣の橋本勘五郎生家にお住まいの脩成氏にあいさつに出向いた折は、古い手紙を見せてもらった。読みづらい文字があり、「測之本の何とか書いてあります。：と私が尋ねると、「測之本ならば、甚平」じゃござるまつせんどか」と脩成氏。「なるほど、甚平」て、崩し書きしてあります」と言つたことを覚えている。

数日後、ニコニコしながら軽い足どりで脩成氏が来館され、手に持った勘五郎

直筆の古文書20点ほどを手渡されたので、寄託品として受け取った。その後も古文書を寄託され、その数は1000点を超えた。古文書などの処理について県立図書館へ相談したところ、肥後細川家永青文庫史料専門員の川口恭子氏ほか、おふた方に来館いただくことになり、事務的な処理を指導してもらった。

欲が出てきた私は、石工道具が残っていないかと尋ねてみると、脩成氏はいつものニコニコ顔で倉庫の中から持つてこられたのは、一本のハツチ。その円筒形の鉄の塊は片方が才オカミの口が裂けたような表情に見え、受け取る私は腰が

引けた。脩成氏は、「弟子が独り立ちするとき、記念に石工道具を一つもつて、持つていくそうですばってん、このハツチは割れるけん、誰ももらわんかんかったさうです」と、ハツチが残った事情を話された。

ありがたく受け取つて東陽石匠館の所蔵品にしたが、それが今もガラスケースに展示されている。

石工道具はともかく、筆書きの古文書などが石工の子孫の住宅に保存されているのは珍しい。往時を知る貴重品であり、「石の匠」である橋本勘五郎が希有（けう）な存在だったと思うと、その古文書がよく残ったものだと思心する。なお、高温多湿に対応できる部屋が東陽石匠館にはないため八代市立博物館に依頼し、橋本家の古文書はそちらに保管されている。

貴重な史料を大切にしていただいた脩成氏は、昨年12月9日朝に黄泉の国へと旅立たれた。享年92歳。晩年は曾祖父の勘五郎に似てこられたのが印象に残る。合掌。

（2019年1月12日）



橋本勘五郎の手に馴染んでいたハツチ
イラスト／上塚尚孝

霊台橋架設計録

江戸時代に築造された石造単一アーチ橋として日本一の規模を誇る、熊本県下益城郡美里町の霊台橋。橋のたもととの碑文の一節には、「弘化三つの年さつき初めより同じ年の霜降り月、日あらずして此橋なる」と刻され、翌春（1947年）に渡り初めと竣工検査が実施されている。

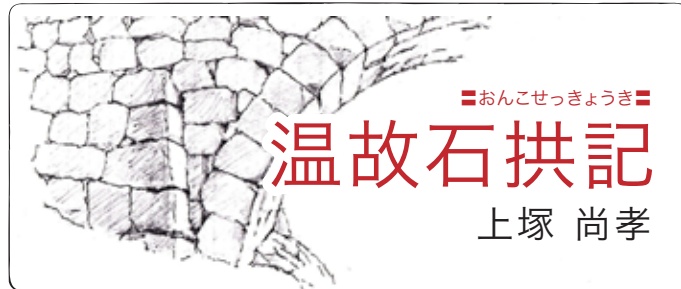
近隣の石工72人が工事に参加

この橋が架かる前は、文化・文政の20年間に木造橋が5回流失するなど、地域住民は何かと不便な暮らしを強いられていた。砥用（ともち）手永*（現・美里町）の惣庄屋・篠原善兵衛（ささわら・ぜんべい、弘化2年10月に惣庄屋就任）は長崎出張の経験がある。その際に目にした石造アーチ橋を緑川に架けようと、企画立案したのではないだろうか。そして、その石橋の設計を託したのが大工棟梁の伴七（後の茂見伴右衛門）だった

茂見家（美里町涌井）に残る古文書類は現在、熊本市立熊本博物館に寄託されており、その中に、伴七が霊台橋架設について残した『桑津留橋御用日記』（1年2カ月間の記録）と『弘化三年午九月 目鑑橋手鑑』がある。前者

の御用日記には、1846（弘化3）年4月4日「石工小屋掛」とあり、後者の目鑑橋手鑑には、近隣の石工連中が馳せ参じたことが記録されている。

「四月十八日ヨリ石工入込候 棟梁種子山手永北種子山村宇助 惣人数式拾三人」、「五月十四日ヨリ右同



■おんこせっきょうき■

温故石拱記

上塚 尚孝

野津手永熊吉入込候 惣人数拾三人、「一 閏五月廿一日ヨリ 岩尾野村石工新助入込候 人数拾式人」、「二 閏五月十六日ヨリ 甲佐平村石工利八入込候 人数拾六人」、「六月十五日ヨリ山中手永中間村石工平左衛門入込候 人数八人」

この記録から石工総数72人と判明。棟梁の宇助は

当時30歳。関係役員は、郡代が松浦津直、惣庄屋が篠原善兵衛。

霊台橋以前の宇助の実績が不明

ここまで分かったところで二つの疑問が生じる。その一つは、宇助の架橋実績である。

霊台橋は径間が「玄九丈三尺三寸余」と28尺余りもあり、江戸時代最大。これほど大規模なアーチ橋を宇助は架けるのか。彼は野津手永の名工、岩永三五郎の弟子なので、腕は確かだろうが、霊台橋以前に総数72人もの石工の頭として、十分な実績があったのか。

三五郎は2度、薩摩へ行っている。1度目は1840（天保11）年から翌年にかけての期間。この間に「吉野の太鼓橋」「孝行橋」「永安橋」を架設。宇助は師匠に同行して薩摩へ行き、腕を磨いたのだろうか。2度目は1846（弘化3）年の西田橋架設の前後。この年に肥後で霊台橋が架けられるので、宇助が手伝うことは無理である。

『調所笑左衛門広郷の履歴概略』や『海老原宗之丞清熙の履歴概略』を見たが不詳。鹿児島市の木原安妹子会員から届いた266ページの分厚い資料『鹿児島県維新前土木史』（鹿児島県土木課編）には三五郎の名は出てくるけれど、宇助の名はない。

宇市と丈八の工事参加も不明

もう一つの疑問は、宇助のすぐ下の弟の宇市とその下の丈八が霊台橋工事に参加したかということ。

何しろ四月十八日の記録は「惣人数式拾三人」と、宇助以外の石工の名は記録にない。岩永三五郎の墓碑に記さ

れた門人8人の中には「卯助」と共に「卯市」の名もあるから、参加の可能性はあるが、宇市は1839（天保10）年2月に矢部手永の野尻村へ両親と共に転居し、矢部で土木事業を任されていた三五郎が薩摩へ招かれたため、代理役を務めている。宇市は、1846（弘化3）年8月から翌年4月にかけて、矢部手永東部の川内川目鑑橋を架けているため、霊台橋工事への参加は不可能と思われる。川内川目鑑橋の工事が終わった1847（弘化4）年7月、御船川目鑑橋工事に兄の宇助、弟の丈八と共に宇市も参加している。

それでは、丈八はどうだろうか。調べたが、丈八が霊台橋工事に参加したことを証明する資料はない。

霊台橋の架設工事記録に宇市や丈八の名は見られない。実弟だから当然のように工事に参加したと考え、メディアなどでも紹介される。橋は立派な出来栄えなので同調したいところだが、慌てて結論づけることもなからう。

※手永とは、江戸時代の大名、細川家独自の行政制度。郡より狭く村より広い行政区画で、その行政の長が惣庄屋



大工棟梁・伴七の「弘化三年午九月 目鑑橋手鑑」表紙

5月12日(日)・13日(月)に開催 第40回記念大会を京都市で

第40回大会を左記の通り、新緑の京都市で開催します。今年は本会の節目の年。そこで記念大会と位置づけ、初めて関西で開催します。例年とは異なり、1日目が日曜、2日目が月曜の日程となりますが、多くの会員の参加を期待し、会場でお会いすることを楽しみにしております。詳細については、別途郵送の案内書をご確認ください。(事務局)

【会場】

「京都市国際交流会館」
京都市左京区粟田口烏居町。地下鉄東

西線蹴上駅より徒歩約6分

【5月12日(日)】

13時 受付開始
13時30分 総会・記念講演会等
16時30分 徒歩にて会場近くの南禅寺水路閣や「ねじりまんぼ」等を見学
18時 会館内のレストラン「玄」にて意見交換会

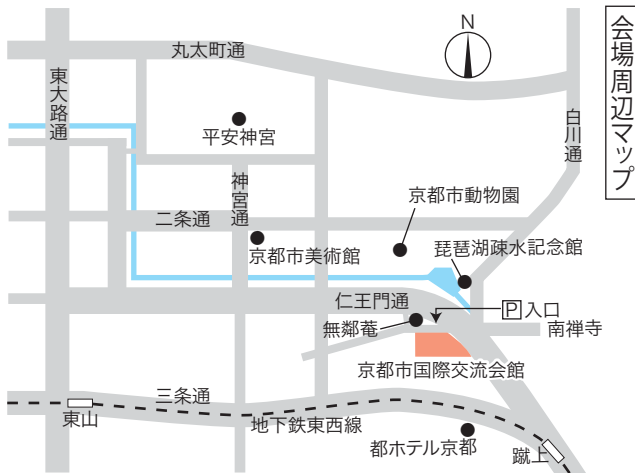
【5月13日(月)】

8時30分 京都駅集合。貸切バスで王子橋(亀岡市)、円通橋(東山五条)を見学、途中昼食

15時 京都駅で解散予定

※問い合わせ先(事務局宛てメール)

jimu@ishibashi-mamorukai.jp



石橋のふる風

石原 史彦「高瀬目鏡橋」
熊本県玉名市

熊本県の玉名市で小学生時代を過ごした。当時、市内を流れる高瀬裏川に架かる高瀬目鏡橋のことは全く知らなかったが、石橋に興味を持つようになった十数年前からは、何度も訪れるようになった。

この橋は、なんといっても、ダイナミックな水切りに特徴がある。そして、築造から170年余りもたつていとは思えないほど、まだまだ現役で活躍できそうなほど丈夫な造りを保っているように見える。

昔はすぐそばの菊池川の河原に渡し場があつて、多くの人や重い荷物を載せた車が行き交い、この橋は大活躍したようだ。

スケッチしたときは、壁石がツツや草に覆われ、それが橋の歴史の重みをより一層、醸し出しているように感じられた。

高瀬裏川周辺は、きれいに環境整備がなされている。今年も初夏のころには、周囲をハナシヨウブに彩られた高瀬目鏡橋を見に多くの人たちが訪れることだろう。

(2018年作品、サインペン画、文
|| 石原史彦)

編集後記

本号も、各会員の石橋への思いが感じられたのではないだろうか。

1面の大肥橋(大分県日田市)撤去への動きは衝撃的でした。架設から120年を経て残る石橋がついに姿を消すのか、保存の道はないものか...と思う会員は少なくないでしょう。

2017年7月、日田市では豪雨により、コンクリート製の道路橋や鉄道橋までもが流失しています。大肥橋は強過ぎたために撤去されなければならないとの見方もできます。大肥橋撤去の動きは、石橋の存在がその地域住民や地域行政によって支えられていることを、あらためて認識させられました。

(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報94号(通算) 2019(平成31)年3月16日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>